平成29年（2017）
阿づまの光
4月号・Aprilo

教主さまお作　灰釉茶盌 銘「弥仙の春」

【弥仙山金峰山土　本宮山梅】

題字出口直日

通巻第577号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

若人の奮ひ起つべきときは来ぬ
若き日本の春は近めり

出口王仁三郎聖師

青年の姿から教わったこと

愛善宣教課主幹　橋本伸作

東光苑月次祭で初めて司会をさせていただいた。厳粛な祭典にお仕えさせていただきながら、大きなご神徳を頂いた。

祭典前日のリハーサル。関東教区の祭員の方々に混じって、一人の青年の姿があった。指導者から細かい指導を繰り返し受けていた。主会にはご神前がないので、おそらくこのような大きな場所で祭典に奉仕する機会は少ないに違いない。自分が同じ年ごろであれば、務まるかどうか分からないような場面に、果たして素直に参加しただろうかと思うと、疑わしい。

青年にはそのような雰囲気はいささかもなかった。できるとか、できないとかではなく、素直な気持ちでお仕えさせていただこうという、まっすぐな姿勢が感じられた。一つ一つの動作を学ぶ姿は、真剣そのものだった。

出口日出麿尊師さまは、

「人間的にみて、好結果を得たこと、かならずしも神の御目に善なりとはいいがたく、人間的な不結果が却って永遠の眼、大局の考えよりすれば善であることがおうおうあるのである。だから、一切を（一々の心も一々の言行も）神にお供えした気持で、いわゆる、善悪を超越して瞬間瞬間をみ旨のままに行動するようつとめねばならぬ」（『信仰覚書』第六巻）

とお示しくださっている。

人間心を捨てて、すべてを神さまのみ心に委ね、その時その時の最善を尽くさせていただく――。わかっているようでも、いざとなったらなかなか実行できない。その青年の姿を拝見しながら、神さまから直に教えを頂いているようだった。

祭典当日、浄衣に烏帽子姿の青年が凛とした姿で入殿してきた。前日とは打って変わり、キビキビとした動作で自分の役を見事にこなしていた。

神さまのご守護を全身に受けているようだった。

oomoto 開座公講

農は国の大本

～今求められる食・農問題～

関東教区特派宣伝使　小藪 資史

大本と農業

大本では、土のことを感謝と敬いの気持ちを込めて「お土」と呼びます。この大地こそ、私たち生きとし生けるものすべての命の源であるという教えです。

大本の教祖・出口なお開祖が示した「大本神論」に、次のような一説があります。

「金銀を用いでも、結構に地上から上がりたもので、国々の人民が生活るように、気楽な世になるぞよ。衣類食物家屋倉庫までも変えさして、贅沢な事はいたさせんぞよ。世界中揃うて喜ぶ様の政治にいたさねば、神国とは申されんぞよ。（中略）金銀を余り大切に致すと、世は何時までも治まらんから、艮の金神の天晴守護になりたら、天産物自給其の国々の物で生活る様にいたして、天地へ御目に掛ける仕組がいたしてあるぞよ」

（「大本神論」第一巻）

金銀をいくら大事にしても、食べ物がなければ私たちは生きていくことができません。しかし、現代は、金銀があればなんでもできると考えられているような時代になっていますが、それでは世の中は続いていかないと宣言しています。

「何程でも外国から買えると申して居るが、何時までもそうは行かん事が在るから、猫の居る場にも、五穀を植え付けねばならんようになりて来るぞよ」

（「大本神論」第二巻）

これは明治36年の言葉ですが、現在の日本は、食料の多くを海外からの輸入に頼っており、いつこのようなことが起こるとも限らない状況です。

天産物自給自足

また、大本のもう一人の教祖・出口王仁三郎聖師は、「農は国の大本」と説き、「天産物自給自足」を唱えました。このことが大本の農に対する考え方の基本であり、衣食住を含めた暮らしや経済のあり方を示しています。

「地産地消」という言葉をお聞きになったことがあると思います。その土地で採れたものをその土地で消費しようというものですが、王仁三郎聖師が説く「天産物自給自足」とは、その土地で採れた産物は天から賦与されたものであり、その天恵の福利を開拓して文明の利用を研究し、国土を経営することこそ、人生の根本天則であると説いています。

「天産自給の天則を知らず、腕力をもって他民族を征服し、巡遊侵略もって国家を組織し、ここに租税徴貢の制を定むるに至れるなり。この弱肉強食の蛮風は、世界を風靡して遂に自称文明強国を現出せるものなり。彼等曰く、優勝劣敗は天理の自然なりと、咄々何等の囈語ぞ、この天理破壊の魔道は、今や根本より廃滅さるべき時代の到着せるなり」

（「出口王仁三郎全集」第六巻「天産自給」）

人類はこれまで、自分の土地のものだけでは飽き足らず、他の土地のものまで略奪してきた歴史を繰り返してきました。これこそ弱肉強食、われ良し、強い者勝ちのあり方であり、今日もなお、経済戦略という形を変えて、深くその精神が横行していると言っても過言ではありません。

大地は神さまのお体

昭和23年、大本の二代教主・出口すみこは、戦後の食糧不足が日本全土に深刻な影を落とす中、米の増収を通して食料の増産や農業者の生活改善に新たな活路を見いだすべく、愛善みずほ会を設立させました。天地の恵みに対する感謝の心を第一義に、お土を生かし、お土の機能をより高める〝土づくり〟によって農産物の増産をはかるよう、農業者に強く働きかけたのです。

すみこ二代教主は、「日本の一番大切なことは、お土のご恩を感謝し増産をすることだと思います。日本はやはり農業国です。みんなその気持ちでお土を大切にしなければなりません」と述べ、大地は神さまのお体であり、お土を拝む心になって農に励めば、いくらでもご神徳はいただけると諭しました。

この「大地は神さまのお体」というところに、大本がお土を敬う根本的な理由があります。つまり、神さまのお体から賜ったものを頂いて生活している。だから〝お土を拝む〟という表現になるのです。

「いまでも地方の純朴な人たちは、朝起きるとすぐに東に向かって合掌し、おあがりになるお日さまを拝んでいられます。これを笑うのが新しい時代の思想だそうでありますが、それは、お日さまの照っていてくださるのを当然なことだと思い、恩を恩と考えることのできない人たちのものでありまして、直接に苗を育てていただき、花を咲かせていただく人たちにとりましては、お日さまはただちに神さまであられます。拝むのは当然であり、拝まねばならないと考えます。わたくしは、人間がお日さま、お月さま、お土さまを拝む精神を失っ

たときに、不幸がやって来たのであると信じております。もう一度素直になって、みんなで拝む心になりましたら、世界に戦争というものはなくなり、人と人とが憎みあったり、疑いあったりすることがなく、本当の地上天国が参ると思います」

（『教主御教示集』出口すみこ二代教主）

昨今では、スーパーなどの野菜売り場に、生産者の顔写真入で「私が作りました」と出ているのを見かけます。生産者の姿が見えることで、消費者の安心材料になりますが、農業者の中には大変謙虚な方がおられて、「作っているのは大地であって、私たちはそのお手伝いをしているだけです」とおっしゃって、「私が作りました」という表現を嫌がる方がおられます。

お土を活かす愛善酵素農法

すみこ二代教主が初代総裁となってスタートした愛善みずほ会は、黒沢浄氏、島本覚也氏をはじめ優れた農業指導者のもとに普及、発展していきました。

やがて、世の中の食料事情が安定すると、愛善みずほ会の方針は増産から農業技術指導へと転換し、島本覚也氏による微生物酵素農法（愛善みずほ農法）を根幹に、その歩みを進めてまいりました。平成14年には、連綿と続いてきたその活動をさらに進展させるため、微生物酵素農法を『愛善酵素農法』と正式に呼称し、これを実践する農業者に認証を与える〝認定制度〟を新たにスタート。現在は、この農法の研究改良、指導普及を始め、新規就農者並びに農業技術者の養成、農事講習会や家庭園芸の指導普及、安心安全の農作物・自然健康食品の流通販売等の事業を行っています。

愛善酵素農法とは、例えば人間の体にも酵素の働きがあって、食べ物を消化したり、栄養素を分解していますが、それと同様に、土壌の微生物が出す酵素の働きを応用した農法です。

ちなみに化学肥料とは、化学的手法により製造された肥料のことで、古くは人造肥料、金肥と呼ばれました。

化学肥料は、それそのものは有効な肥料ですが、それだけを長期に土に与え続けると、土壌がやせ細って連作障害などを生じやすくなります。

愛善酵素農法は、天産物自給自足を根幹とした農業理念を基（もと）に、土壌の理化学的条件を改善し、その土中の生態系を活かす土づくりに主眼を置いた「環境保全型持続性農業」なのです。

〝正食〟４つの柱

こうしてお土から採れたものを正しく頂くことも大切なことです。大本ではこれを正食（清食）と呼んでいます。

正食には４つの柱があります。１つは四季それぞれに収穫されるものを頂く季節食。２つ目はその土地土地で産出されたものを頂く国土食。３つ目は食べ物の全部を頂く全部食。４つ目はなるべく自然のままに頂く自然食。この４つが正食の基本となっています。

王仁三郎聖師は、柿を秋に食べるのは、夏の間に体に蓄積された毒素を消すためだと述べています。また春になれば人間の体が柔らかくなるので筍のような石灰分に富んだ食べ物を頂くようにちゃんと用意されている。それを夏に食べる物を春に頂いたり、春に頂く野菜を冬に頂いてみたりするので、人間の体が弱くなってくるんだと説いています。

実際に夏に食べるトマトやキュウリは体を冷やす効果があります。また冬野菜や根菜類が体を温める効果があります。現在では、季節に関係なく頂くことができますが、季節の移り変わりと体の変化に適しているとは言えません。

また、先程の天産物自給自足のところで述べましたように、その土地や風土で育った人間には、その土地、風土でできた食物を頂くのが自然だと教えています。

王仁三郎聖師は、東洋諸国は陽の位置にある国土であるから陽の食べ物である米を常食とするのが国土自然の道理であり、西洋は陰の位置にあるので陰性の食べ物である麦を常食とするのが道理であると教えています。またお米は陽の食べ物なので勇気が出るとも述べています。

食は神さまからの賜物

このように、日本には日本人の体質にあった食べ物が四季を通じて頂けるようになっているのです。

大本がＴＰＰについて反対の立場をとっているのも、日本人が農耕民族として先祖代々受け継いできた農のあり方が壊される危険性をはらんでいるだけでなく、「天産物自給自足」の原則から大きくかけ離れた、「今だけ、金だけ、自分だけ」のやり方に染まってしまうと危惧するからです。まさに「われ良し、強い者勝ち」の世の中になってしまいます。

私たち人間にとって食は、子々孫々に至るまで欠くことのできない大切な神さまからの賜物であります。その源であるお土を大切にすることこそ、人も国も共に栄える道と言えるのです。

結びに、王仁三郎聖師とすみこ二代教主の道歌を紹介します。

あらがねの土は万有産出の
　基（もとい）なりせばおろそかにすな

お土からあがりし物を大切に
　せざればこの世は治まることなし

（出口王仁三郎 詠）

日の御恩月のお恵み土の恩
　はなれて人の住むところなし
人はみな土よりいでて土に生き
　土の恩うけ土にかくるる

（出口すみこ 詠）

掲載文は、平成28年11月16日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

教本1級～3級認定講習会

「教本1級～3級認定講習会」が2月24・25日の両日、大本東京宣教センターを会場に開催され、1・2級クラス7人、3級クラス6人の、合わせて13人が受講した。

参加者は本部講師の指導のもと、大本の発祥から霊界の実在、人生の目的、四大主義などの大本講話を受講したほか、対話実習やスピーチの仕方などを通してみ教えの伝え方について学んだ。

受講者からは「スピーチの仕方が大変勉強になった。人前でもしっかりみ教えをお伝えできるよう頑張りたい」「み教えを平易にわかりやすくお伝えする難しさを実感した」「あらためてみ教えの素晴らしさを知ることができた」などの感想が寄せられた。

大本のみ教えを、教本にそってわかりやすく説明

東光苑月次祭・春季合同慰霊祭

東光苑月次祭・交通安全祈願祭・春季合同慰霊祭は、3月12日、午前10時30分から、斎主・猪子恒東京宣教センター次長のもと執行され、307人が参拝した。

祭員は福島・群馬・栃木・山梨・東京神奈川各主会の有志が、伶人は二絃の会関東支部、いづのめしんゆ拝読は関川喜一郎栃木主会長、添釜は神奈川主会が担当した。

祭典後、東京本部を代表して猪子次長があいさつに立ち、聖地からのホットニュースとして、開教120年記念事業の一環で建設されている天恩郷信徒会館の上棟祭の様子を写真で説明。また、3月26日から30日までの5日間、天恩郷と梅松苑の両聖地で開催される高校生講座を紹介し、参拝者に各主会からの送り出しを勧め、続いて昨年の高校生講座の紹介映像が放映された。

引き続き、関東教区青年部が少年祭に向けての合同合宿を案内。夏の行事に向けての青少年の送り出しを依頼した。

厳かに春季合同慰霊祭を執行

21世紀・生きがい講座

第169回「21世紀・生きがい講座」は、3月15日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、猪子恒東京宣教センター次長が「出口直日、日出麿からみたみろくの世」～立直しの提言～と題して講話した＝写真。参加者は24人（内、一般5人）。

講師は「三代さまは、日出麿先生ご静養の竹田時代、日々、農業に勤しみ、真剣にお茶や能楽、短歌に精進された。そうして農を中心とすることで、政治や経済、文化も本当に立直ると指導された」と述べ、明日香村保護をされた経緯や、エスペラントの奨励などについても語った。

参加者からは「三代さまの日本人としての精神、日出麿先生の慈愛の心を、あらためて学ばせていただきました」（男性・信徒）等の声が寄せられた。

大本東京本部ホームページ

祭典・行事のご案内をはじめ、東京宣教センター所蔵の耀盌や、歴代教主・教主補さまのお作品が閲覧できます。また、本誌「阿づまの光」もWebページでご覧いただけます！

左下のQRコード・URLからアクセスしてみてください。

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.com

東光苑祭典・行事予定

4月

1日（土）午前10時30分
東光苑観桜茶会

2日（日）午前9時30分（9時受付）
新入信徒研修会（春の集い）

9日（日）午前10時30分執行
東光苑春季大祭

19日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題 死後の世界
～人はなぜこの世に生まれたのか～
講師 柿崎 哲男（愛善宣教課主任）

23日（日）午前10時30分執行
第35回企業繁栄祈願祭

29日（祝・土）午前10時30分執行
四代教主毎年祭（16年）

5月

4日（祝・木）午前10時30分執行
教主生誕祭・三代教主（115年）
教主補（120年）聖誕祭

5日（祝・金）午前10時30分執行
開教125年 みろく大祭遥拝祭

14日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

17日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題 今を大切に生きる
～幸せを見つける法則～
講師 鈴木林太郎（総務部総務課主事）